

竹内街道と横大路

京都教育大学

名誉教授

和田 萃

一 はじめに

本年は、竹内街道が敷設されて千四百年の佳節に当たっており、大阪府や奈良県では種々の行事が催されている。それにちなんで本稿では、竹内街道と横大路の歴史的背景を考えてみたい。

私事にわたって恐縮であるが、奈良盆地を東西に走る横大路を歩き始めたのは、大学院生の頃であったから、かれこれ四十四、五年も前のことである。葛城市長尾の長尾神社から竹内街道をたどり、竹内の集落から初めて竹内峠（標高二八九メートル）を越え、磯長谷に下りた日のことをよく覚えていて、手控えによれば、昭和五十四年九月九日（土）のことであった。以下のことを記している。

「うぐいすの関」とも称された竹内峠には、明治十八年（一八八五）三月に建てられた「竹内嶺開鑿碑」を始めとして、旧跡

「峠茶屋跡」、大坂三郷の「上町組 山上講」が安永六年（一七七七）に建立した役行者堂、寛政二年（一七九〇）三月に阿闍梨宥尊が建立した宝篋印塔、神奈邊大道心建立の「右はせ寺迄七里」「左さかい」と刻む道標等があり、近世中期から明治中頃にかけて、多数の人々が竹内峠を越えたことを知った。おそらく古代以来、幾多の人々が峠を越えたのであろう。峠に立つて往時を偲び、「古道」のもつ意義を改めて考えるようになったのである。

爾来、竹内峠を二十回は優に越えているが、近年、少し足が遠のいている。竹内峠付近に南阪奈道路が開通し、景観が大きく変化したからである。往時を知る者として、古代以来の景観が大きく変わったことは、何とも寂しい限りである。

以下、『日本書紀』の推古二十一年（六一三）冬十一月条にみえる記事、「掖上池、畝傍池、和珥池を作る。また難波より京に至るまでに大道を置く」について、その歴

史的背景を検討する。

二 大道敷設の歴史的背景

推古二十一年（六一三）冬十一月条を検討する前に、推古十六年（六〇八）六月十五日に隋使裴世清らの一行が難波津に至り、八月十二日に小墾田宮に至った記事にふれよう。

推古十六年（六〇八）六月十五日、隋使裴世清らの一行は難波津に入港し、「新しき館」に宿泊した。その後、八月三日に三輪山南西麓の海石榴市で、裴世清らの一行は額田部連比羅夫の率いる七十五人の飾騎の出迎えを受け、八月十二日に小墾田宮に至っている。

八月三日の記述から、隋使裴世清らの一行は難波津から川船に乗り換え、草香江から長瀬川などの川筋に入り、大和川本流を遡ったと思われる。そして柏原市青谷付近で下船して、陸路、龍田越えをし、大和側の

三郷（奈良県生駒郡三郷町）に至り、其処からまた小船で大和川を遡って、海石榴市に至ったかと推定される。古来、青谷上流の亀ノ瀬は激流で、なおかつ有史以前からの地滑り地帯であることから、舟での往来は避けられてきた経緯がある。推古十六年の時点では、難波より京に至る大道は、まだ敷設されていなかった。

推古二十一年（六一三）冬十一月条に大和で掘削された三方所の池について、簡略にふれよう。掖上池は、御所市池之内集落の西方域に広がっていた池で、今もその痕跡が残っている。西方を北流する葛城川の水を引いたものとみてよい。当時、蘇我大臣馬子は絶対的な権力者であったから、曾我川中流域の曾我の地（橿原市曾我町）から、西南西の掖上付近にまで領域を拡大していた可能性がある。曾我の地は、馬子の父である蘇我大臣稲目が輕の地（橿原市大輕町付近）に進出する以前に、本拠としていた所であった。

畝傍池は、畝傍山南東麓の橿原神宮境内に所在する深田池とみてよい。畝傍山から流れ込む水量は少ないが、湧水が豊富であり、畝傍山の南西域や北西域を潤している。皇極元年（六四二）四月条にみえる蘇我大臣蝦夷の「畝傍の家」は、深田池の近くに所在した可能性が大きい。

和珥池は、JR桜井線帯解駅の西南に所在する広大寺池（奈良市池田町・今市町）とみてよい。ワニ氏の一族により開発

された池だろう。古来、広大寺池の水利権は、稗田村（大和郡山形市稗田）が管理していた。『古事記』の序文によれば、天武天皇は稗田阿礼に勅語して、「帝王日嗣」「先代旧辞」を誦習させたとみえている。阿礼は稗田出身の舍人であった。

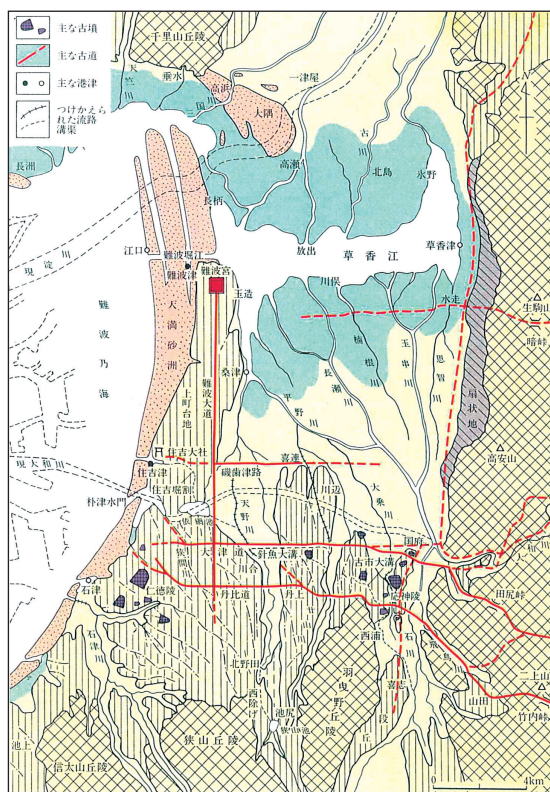
推古二十一年十一月条にみえる「難波より京に至るまでの大道」とは、難波津より南下して大津道（長尾街道）や丹比道（竹内街道）に取り付いた道であり、以下にふれる難波大道の前身の道であった。冒頭に「難波より」とみえることが注目される。推古天皇の小墾田宮が所在した「京」から、難波に至るまでに大道を置いたのではない。「難波」から京に至るまでの大道を整備したのである。

推古二十一年（六一三）冬十一月条にみえる、「難波より京に至るまでに大道を置く」という記述には、やや分かり難いところがある。難波は大阪市付近の古地名。『日本書紀』には、仁徳三十年九月条に「難波の渚」、同六十二年五月条に難波津、允恭四十二年正月条に

難波津、欽明三十一年七月条に難波津、推古十六年六月十五日条に難波津がみえている。したがって右の記述は、難波津から飛鳥の雷丘近くに所在した推古天皇の小墾田宮付近まで、「大道」を敷設した意と解される。

右にみるように難波津については、『日本書紀』に多くの記事がみえるので、難波津付近から大津道（長尾街道）や丹比道（竹内街道）に至る大道は、王権によって整備されたのでは、と考えている。

以下、難波より京に至る大道については、文章のみでは十分に説明しにくいので、日下雅義氏が先に著わされた『古代景観の復原』に掲載されている図を借用



日下雅義氏『古代景観の復原』（中央公論社 1991 年）

し、記述を加える。難波津から南下した道は、大津道（長尾街道）や南の丹比道（竹内街道）に取り付いた。古代の河内では、旧大和川の分流である恩智川・玉串川・楠根川・長瀬川・平野川が草香江に流れ込んでいたため、難波津から直接、藤井寺市惣社付近や羽曳野市古市へ至ることは不可能であった。そのため難波津から、一端、南下して大津道や丹比道に取り付いたのである。なお難波大道は孝徳朝に敷設されたものであるから、推古朝においては別の道筋で南下し、大津道と丹比道に取り付いていたとみてよい。

三 大小路と大津道（長尾街道）

大津道（長尾街道）の起点は大府堺市の大小路。旧堺港から南東へ約九〇〇メートルの所で、北東から南西に延びる紀州街道と交差する所、そこが大小路である。

交差点の南西に堺警察署があり、北側の歩道に昭和三十三年三月に建てられた道標があって、東面に「紀州街道」と記す（平成四年十月に堺市により建立されたもの）。交差点の北東隅にも、平成四年三月に堺市教育委員会によって記された説明板があって、堺のルーツは大小路であると記す。

その内容を摘記すると、交差点のすぐ南東に所在する開口神社に伝わる応永二十三年（一四一六）の文書に「おう小路」の名を記すが、現在の位置とは異なっており、この

辺りからほぼ真東の方向に延び、長尾街道（大津道）に続いていったものと考えられる、との指摘があつて注目される。

右の指摘に基づけば、大小路にごく近い開口神社付近から、東方へ真っ直ぐに大津道（長尾街道）が延びていた可能性も考えられるだろう。

大津道（長尾街道）を東へ真っ直ぐにたどると、雄略天皇陵のすぐ北側を通り、藤井寺市惣社付近に至る。惣社付近は、古代に河内国府が所在したところで、餌香の市が立ったことで知られている。そこから石川を渡り、河内と大和の国境である穴虫峠や田尻峠を越え、二上山々麓から竹内をへて、葛城市長尾の長尾神社（葛城市磐城）に至る。

一方、丹比道（竹内街道）は、大津道を少し東進した所に鎮座する方違神社（堺市北三国丘町）付近から南東に進み、堺市長曾根町付近から東進し、金岡神社（堺市北区金岡町）付近をへて野中寺へ。そこから古市大溝沿いを南下し、峯ヶ塚古墳付近で東に向い、古市をへて石川を渡り、竹内峠を越え竹内をへて、葛城市長尾の長尾神社に至る。

葛城市長尾の長尾神社と、東方の桜井市仁王堂の寺川に架かる小西橋までが横大路である。小西橋から少し西方の小字仁王堂から、南へ阿倍山田道をたどると、明日香村雷付近に所在した推古天皇の小墾田宮に達した。

四 大臣馬子による大道の敷設

推古二十一年（六一三）十一月に、河内や和泉で開始された大津道や丹比道の敷設、さらに大和の奈良盆地における横大路の敷設は、蘇我大臣馬子の主導により行なわれたかと推測する。大和の有力豪族では、五世紀後半に物部氏が河内東部の柏原地域に進出したのを嚆矢として、六世紀前半に大伴氏や阿倍氏も、それぞれ高石市の浜寺付近や大阪市阿倍野区の阿倍野付近に進出した。

蘇我氏の進出はやや遅れたようで、そのため蘇我氏は堺市から泉佐野市に及ぶ一帯を、新たな拠点とするようになったらしい。大津道（長尾街道）の起点が、旧堺港に近い大小路であるのも、そうしたことに関わりがあるかと思われる。

皇極三年（六四四）三月条に、「休留、豊浦大臣の天津の宅の倉に子産めり」とみえ、蘇我大臣蝦夷の別宅が天津（泉大津市）に所在したと記す。泉大津市は高石市の南に位置している。また大化五年（六四九）三月十七日に左大臣阿倍内麻呂が薨じた直後、右大臣の蘇我倉山田石川麻呂は異母弟である蘇我臣日向により、中大兄皇子を害せんとしていると讒言された。それを信じた中大兄皇子は、兵を起して大臣の宅を囲もうとしたので、石川麻呂は子の法師と赤猪を伴い、茅渟の道より大和の山田の家

（山田寺の地）を目指したとみえる。

舒明朝から孝徳朝にかけての時期には、蘇我大臣蝦夷や蘇我倉山田石川麻呂は、堺市付近から泉佐野市付近に及ぶ一帯を拠点としていたらしい。

以上のことを踏まえると、大小路を起点とする大津道（長尾街道）や方違神社付近から分岐する丹比道（竹内街道）と、奈良盆地を真東西に走る横大路は、推古朝に蘇我大臣馬子の主導により、旧堺港に近い大小路を起点とした、河内・和泉と大和を結ぶ東西道路として敷設されたと想定しうるかと思う。

なお近年、柏原市立歴史館々長の安村俊史氏により、難波より京に至る大道について、故岸 俊男氏の説⁽¹⁾や、右に述べた私説⁽²⁾とは大きく異なる説⁽³⁾が提唱され、注目されている。

安村氏の説では、「難波より京に至る大道」のルートとして、難波津―四天王寺―洪河道―洪川廃寺―船橋廃寺―衣縫廃寺―竜田道―平隆寺―斑鳩寺―中宮寺―額田寺―太子道（筋違道）―小墾田宮とされている。難波津から南下して大津道や丹比道に取り付くのではなく、八尾市内に残る洪川道をたどり、船橋廃寺や衣縫廃寺をへて大和川左岸の堤防上を進み、青谷付近で渡河し、右岸沿いの竜田道を取り、斑鳩から南東に延びる太子道をへて、小墾田宮に至るものである。

洪河道や太子道（筋違道）については、「大

道」の概念に相応しいと思われるが、他の箇所は必ずしもそうではない。また真東西に走る大道も見当たらない。安村氏の説については、今後、さらに考えてみたい。

『万葉集』巻一の第五二番歌にみえる「藤原宮の御井の歌」では、「日の経の大御門」を東門、「日の緯の大御門」を西門と歌っているが、文意が不明である。堺の大小路から伸びる大津道（長尾街道）、大津道から分岐する丹比道（竹内街道）、大和の横大路は、いずれも真東西に走っており、これらの道が推古朝の「大道」であったと考えられる。

素人考えであるが、真東西の道の敷設は、任意の地点に柱を立て大きな円弧を描き、柱の影の先端が午前と午後には円弧と交わる二点を結べば、真東西の直線を引くことができる。同様の方法を繰り返し用いれば、真東西に走る長距離の大道を敷設することができる。したがって真東西に大津道・丹比道や横大路を敷設することは、それほど難しくはなかったとみてよい。

一方、真南北の線を引くのは難しい。想像の域を出ないが、小高い丘から北極星の位置を見定め、その線上の位置に灯火を持つ人を多数立たせ、翌朝に真南北のラインを決定したかと思われる。奈良盆地を真南北に走る上・中・下ツ道の敷設は、斉明朝に至ってようやく可能になったことを踏まえると、推古朝に真東西に走る大津道・丹比道や横大路が敷設されたことは十分に考

えうる。

以前にすでに述べたことであるが、管見の範囲で「横大路」という呼称の初見は、建久四年（一一九三）四月六日の「葛下郡平田御荘総追捕使清原正秀注進状」（談山神社文書）二八号。『鎌倉遺文』では第二卷六六七号に、磯野郷（大和高田市磯野町を中心とした一帯）の四至として、「北限横大路ヨリ北二町行西東畔際」とみえるのが最も早い。なおこの文書に関連する「大和国磯野荘指図」（『日本荘園絵図集成』下巻）があつて、そこにも「横大路」の記載がみえる⁽⁴⁾。

横大路については、まだ述べねばならないことが多くあるが、紙幅が尽きたので別の機会に譲りたい。

【注】

- (1) 岸 俊男「古道の歴史」『古代の日本』5に所収、一九七〇年、角川書店。
- (2) 和田 萃「横大路と竹ノ内街道」『環境文化』四五号。一九八〇年、財団法人環境文化研究所。同『河内の古道』（藤井寺市文化財）第七号、一九八六年。
- (3) 安村俊史「推古二十一年設置の大道」『古代学研究』一九六号、古代学研究会、二〇一二年。柏原市立歴史資料館『難波より京に至る大道を置く』、二〇一三年。
- (4) 和田 萃 注(2)の「横大路と竹ノ内街道」を参照されたい。